

京大 広報

Kyoto University



※ P4805 参照



※ P4807 参照



※ P4801 参照

2017.3
No. 728

目次

[巻頭言]

二つの研究所が統合してウイルス・再生医科学研究所が
できました 4780
ウイルス・再生医科学研究所長 開 祐司

[大学の動き]

- 新年名刺交換会を開催 4782
- 京都大学地域講演会(静岡講演会)および京友会を
開催 4783
- 第 67 回京都大学未来フォーラムを開催 4784
- 平成 29 年度概算要求内示概要 4785
- 京都大学重点戦略アクションプラン (2016-2021)
(第 2 版) 着手事業 4790
- 第 3 回 JASTIP シンポジウムを開催 4792
- 平成 29 年度一般入試 (前期日程) 合格者数 4793

[部局の動き]

- 寄附講座・寄附研究部門の設置・更新 4794
- ウイルス・再生医科学研究所開設記念式典・シンポ
ジウム・祝賀会を挙行 4797
- 東南アジア地域研究研究所が発足 4798

[寸言]

昔の授業と今の授業 4799
二間瀬 敏史

[随想]

火山にかかわる迷信 4800
名誉教授 石原 和弘

[榮譽]

- 稲葉カヨ 理事・副学長が紺綬褒章を受章 4801

[話題]

- 宇治地区新年互礼会を開催 4802
- 国際共同シンポジウム「The Future of the Study
of Education - 教育研究の新たな展開 -」を開催 4802
- 第 15 回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催 4804
- 先進医薬研究振興財団より海外留学助成の受領 4805
- 第 1 回思修館の集いを開催 4805
- 山極壽一 総長ら京都大学一行がマヒドン大学を
訪問 4807
- 第 14 回京都大学福井謙一記念研究センターシンポ
ジウムを開催 4808

[訃報]

藤多 哲朗 名誉教授 4809



京都大学



巻頭言

二つの研究所が統合して
ウイルス・再生医科学研究所が
できました

ウイルス・再生医科学研究所長 開 祐司



ウイルス・再生医科学研究所は昨年10月に発足した新しい研究所です。教員定員が40名規模の二つの研究所が統合して、生物・医学系の大学附置研究所としてはかなり大型になりました。母体であるウイルス研究所と再生医科学研究所は共に国立大学共同利用・共同研究拠点として認定されており、全国に広がる研究者コミュニティに向けた中核研究拠点の役割を果たしてきました。統合後も、それぞれが運営してきた“ウイルス感染症”拠点と“再生医学・再生医療”拠点は、活動をそのまま維持・発展していくことになりました。その広報の意味を込めて新研究所の名称はPPAP的なことは承知で、二拠点を想起させるものにしました。ここでは京大広報という事で学内向けとの言い分け付きで、少し違った個人的視点で新研究所への期待を書きます。

ちょうど40年前、私は有機化学専攻のD1でした。とある高名な先生の喜寿を祝うシンポジウムがありました。細菌類や酵母を取り上げて、その背後に一貫する生命の戦略をみるというようなことでした。そこで手を挙げて質問してみました。「生き物は死ぬものだという方向の研究ってないんでしょうか」会場にドツと笑いが充満して演者が立ち往生しましたから、ザワザワが収まりませんでした。そうしたら次演者でトリだった当の喜寿の先生が「なるほど、そういうこともあるかも知れない」と引き取ってくださいました。それで会場は元の静けさを取りもどして、シンポジウムは進行していきました。内心「やっぱり、この人は偉いな」と思いました。けれど、回答はありませんでした。

数年後に助手になって動物細胞の分化をテーマに仕事をするようになりますと、全ての生き物は細胞を単位として“生きている”ことに改めて思い当たりました。細胞はよくできた化学機械(Chemical machine)であって、人間が作る熱機関やメカとは本質的に違います。分子生物学の示すところでは、生き物は全て(真正細菌も古細菌もヒトを含む真核生物も含んで)共通の祖先細胞に由来して絶えることなく今日まで続いているということです。遺伝物質を複製して二分分裂で殖えるというのが生き物の普遍的な生存戦略です。老廃物や望まない反応副生物が蓄積する前に二分分裂すれば、半分に希釈されます。代を重ねるごとに希釈されます。生き物のほとんどは単細胞で生きていて、だから彼らは基本的に不老不死です。遺伝子変異も頻繁に入るけれど、生き残るものが死にゆくものを瞬間に乗りこえていきます。こうして進化もします。餓死か事故死があるのみということになります。しかし、一群の遺伝子セットを読み出すように特化(細胞分化)して分裂を止めてしまうと、もう不死ではあり得ません。こういう細胞で作った身体に配偶子を乗せて次世代に運ぶ戦略をとることになった私達は、死ぬ運命を背負った身体をまっています。こうして、私は40年前の疑問に再会しました。

20世紀は前半が輝ける物理学の時代でした。これが原子爆弾に帰結したことに幻滅した物理学者達によって分子生物学は始まり、1953年のDNA二重らせんの発見は事件でした。分子

巻頭言

生物学は細菌に感染するウイルス研究によって拓かれ、1956年に設立されたウイルス研が我が国の分子生物学に大きく寄与したことはよく知られています。一方、再生研の母体である結核研究所の設立は1941年と更に古いです。が、抗生剤の発見によって人々が多くの細菌感染症から解放されると次の課題を担うことになります。20世紀化学は薬剤合成や栄養学にも発展をもたらしました。日露戦争では銃弾に斃れるよりも多くの犠牲者を出した脚気も栄養学の問題であり、今はほとんど見られなくなりました。この間に日本人の平均寿命は40年ほど伸びました。20世紀後半は化学機械としての細胞をめぐる生物学の時代であり、ヒトを理解する方向に生物学が輝いた時代でした。

こうしてできたヒトの後半生40年間は命を次代に繋いだ後に残る時間で、いくら待っても進化の淘汰圧のかからない時間です。遺伝子も鍛えられません。医学は原因を除けば病がCUREするとして進んできました。一方で、その埒外にあるものはCAREするための施設に委ねてきました。そういうものもCUREの内に繰り入れる事が求められている現在、ウイルス感染症も再生医療も共にすこぶる21世紀的な医の先端課題です。我々が研究所を統合したのは、これら今世紀的課題が背後の隠れた次元で繋がっていると思うからです。ヒトの身体は60兆ともいわれる数の細胞が構成する複雑で動的な細胞社会の上に成立しています。この次元を双方の視線から開拓することで「医の未来」像に向き合いたいと考えています。これは本質的にチャレンジだと思います。私自身が統合新研究所の「医の未来」研究に期待を寄せるものの一人でもあります。皆様のご理解とご支援に期待する所以です。

<蛇足>

10年前の2007年、色々な都合が重なってなぜか私がNHKのサイエンスゼロの収録にいく羽目になりました。「ここまで来た再生医療」という回で、年末にはヒトiPS細胞の論文がでることになるのだからタイムリーな企画という訳です。ナビゲーターは安めぐみさんの頃で、夕方からの打合せには私の隣りでずうっと付き合って下さいました。挿入VTRも台本も既に準備万端でした。しかし、読み合わせを始めてみるとだんだんと腹が立ってきました。「私は科学者として、とてもそんなことは言えません」という内容のせりふに次々とでくわして、台本そのものをどんどん書き替えてしまいました。スタジオに移って収録に入ったのは、もう午後9時半も過ぎていて、終わったのは午前1時を回った頃となりました。それでも、安さんはずうっとにこやかなのが印象的でした。(私は恥ずかしいから放送された番組を見たことはありません。)

ES細胞・iPS細胞がでてくると「万能細胞」という言葉に括られて、あっという間に魔法の世界に連れていかれます。何に対してどう万能なのか?を言わぬまま、多くの妄想をのせて、あたかも学術用語のように使われます。一体、誰が世間にまき散らしたのでしょうか。これに相当する欧米語は無いのです。だから、訳せません。「医の未来」ではしっかりとScientificなlogicとtermsを使って語ることを肝に銘じたいものです。



ウイルス・再生医科学研究所開設記念式典・シンポジウム開催直前のスナップ写真
(左から、原 彰子 新研究所総務掛主任、朝長啓造 教授、阿曾沼明裕 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授、巖佐 庸 九州大学理学研究院教授、小柳義夫 教授・副所長、開祐司 教授・所長、山岡義生 名誉教授(再生医科学研究所・初代所長)、河本 宏 教授・副所長、服部和枝 新研究所総務掛長)

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

新年名刺交換会を開催

1月5日(木)、恒例の新年名刺交換会を百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催しました。長尾 真、尾池和夫の歴代総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・副学長、監事、部局長、教職員など約160名の参加を得て、盛大に行われました。

まず、山極壽一 総長より新年の挨拶がありました。2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、大学教育も加速するように求められていますが、大学教育は短期的な成果を目標に掲げて行われるものではなく、本学では1897年創立以来、世界的な視野を持ち、社会をきちんと俯瞰できる能力を持った人材を育てることを目標として掲げてきたことについて述べました。

また、英国オックスフォード大学出身の古生物学者であるベヴァリー・ホールステッドの著書で、今西錦司やその弟子達の印象を書いた「今西進化論」批判の旅」を紹介し、さまざまな反対意見を弟子達が述べ合うにも関わらず、その大きな学問的なまとまりというものが保たれている本学の伝統がオックスフォード大学の伝統と似ていることと、京都エリートという言葉について述べられました。

最後に、これからの京都大学を支えていくためには、いかに本学の伝統というものを大切に、近視眼的な視野ではなく、長期の視野をもち、素晴らしい矜持をもった学生達を育てるということを大きな目標にしなければなりません。そのためには、我々自身がこういった伝統に従い、狭い学問に明け暮れるだけではなく、広い視野を持ち、尚且つ、知性の養分を蓄えながら、学問的に対等な立場を保つという大きな学問の矜持をきちんと備えて、そしてそれを発揮していかなければならないとの所感を述べられました。

引き続き、長尾元総長の発声により乾杯し、あちらこちらに歓談の輪が広がりました。



新年の挨拶をする山極総長



会場の様子



乾杯の発声をする長尾元総長



尾池元総長と佐藤直樹 理事・副学長

(総務部 (総務課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

京都大学地域講演会（静岡講演会）および京友会を開催

地域講演会は、これまで蓄積してきた知的財産や現在進行中の教育研究活動の成果等を全国に紹介し、広く社会に還元することを目的として1997年から開催しているものです。

このたびは、2月4日（土）に静岡市のニッセイ静岡駅前ビルにおいて、経済学研究科の岩本武和 教授が「世界金融危機後のグローバルマネーの行方—おかねの流れから見る世界経済」と題した講演を行い、講演の後には、徳賀芳弘 副学長と岩本教授による対談および会場の参加者を交えて質疑応答を行いました。岩本教授は国際収支表の見方を詳しく説明して、日本、米国、中国の違いを解説した他、リーマンショック前後の欧米間の資本移動の変化、さらには近年の中国の資本移動の異変についても言及しました。講演会には、高校生、大学生の他、国際金融に関心の高い金融機関関係者など169名の参加があり、熱心に耳を傾けました。

参加者からは、「身近なニュースの点と点を線にしていただけたセミナーでした」、「世界の経済を「マクロ経済」で見ることがとても新鮮で、新しい視点をいただいた気がします」などの感想が寄せられました。



挨拶する徳賀副学長（講演会）



講演する岩本教授（講演会）



会場の様子（講演会）

また、講演会終了後、同市内のホテルにおいて、静岡で同窓会活動をしている京友会が開催されました。65名の同窓生の参加があり、本学からは徳賀副学長、岩本教授および大学関係者が出席しました。最初に徳賀副学長、岩本教授の挨拶があり、続いて、高木明幹事（医学



挨拶する徳賀副学長（京友会）



挨拶する岩本教授（京友会）



開会挨拶する高木幹事（京友会）

大学の
動き



全員で斉唱（京友会）

部・1978年卒）の開
会挨拶と乾杯の発声に
より開宴となりました。
和やかな交流が進み、
全員で「琵琶湖周航の
歌」および「逍遙の歌」
を斉唱し、盛会のう
ちに閉会となりました。

（総務部（渉外課）

[目次に戻る ↗](#)

第67回京都大学未来フォーラムを開催

今回の京都大学未来フォーラムは、工学部卒業、工学
研究科博士課程修了生で、名誉教授の土岐憲三 立命館
大学歴史都市防災研究所教授を講師に迎え、2月21日
（火）に百周年時計台記念館において開催しました。

「京都の文化遺産、明日はどうなっているだろう」と題
した講演の中で土岐教授は、1995年の阪神淡路大震災
以降、地震防災と文化財保護の二つの分野の協力が重視
されるようになったことを話しました。そして、京都の建
都1100年祭と1200年祭でおこなわれた記念事業の変
化、各国の国家予算における文化予算額の比較などを説明し、未来の人々から2000年頃の京
都人は自分たちの事しか考えなかったと言われたら恥ずかしくないですか?と問いかけ、現代の
京都や日本は、先人から多くの文化遺産を得ており、現代の我々も10年、50年、100年先の
未来の京都のあるべき姿を考え、必要な事業をおこなう必要があると語りました。



講演する土岐教授

参加者からは、「文化遺産の保全について学ぶ大変貴重な時間でした」、「先生の文化への情



会場の様子

熱に接し、これからは、各地の
人々が地元の文化遺産のことを
真剣に考えていかなければいけ
ないと思いました」、「自分は京都
で工学を学んでいるので、未来
に向けて何を残していけるのか、
考え、行動していくことで貢献し
たい」などの感想が寄せられま
した。

（総務部（渉外課）

[目次に戻る ↗](#)

平成29年度概算要求内示概要

1. 大学院・学部組織整備計画

部局名	事項（事業）名
医学部	医学部人間健康科学科の入学定員の改訂

2. 機能強化経費

機能強化促進分：

- ・ 4つの戦略、26件の取組からなる本学の機能強化の方向性に応じた取組構想に対し、機能強化経費（機能強化促進分）が措置されました。
- ・ また、運営費交付金と一体として、意欲的な教育研究組織整備等を支援する国立大学法人機能強化促進費が措置されました。
- ・ 10件の取組について、基幹経費化が行われました。

部局名	区分	事項（事業）名	新規/ 継続	備考
戦略①：独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出				
ウイルス・再生医科学研究所	組織整備	個体の中の細胞社会学の確立と応用－新世代細胞療法へ向けて－	新規	
高等研究院 物質－細胞統合システム拠点	組織整備	国内外の卓越した研究者の英知集結ハブとなる国際研究拠点の機能強化	新規	
事務本部（企画・情報部）	組織整備	京都大学研究連携基盤構想	継続	基幹経費化
東南アジア地域研究研究所	プロジェクト	組織統合による革新的生存基盤研究の体制整備	新規	
理学研究科 工学研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科 生存圏研究所 防災研究所 事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター））	プロジェクト	宇宙開発利用を担うグローバル人材育成のための宇宙学拠点の構築	継続	基幹経費化
医学研究科 医学部附属病院	プロジェクト	ヒト試料・情報を活用する研究環境および高度国際人材育成モデルの構築事業 －医学・物理・数理科学分野の知の結集による革新的疾患総合医科学「Diseasomics (ディージョミクス)」の創成－	継続	
医学研究科	プロジェクト	ゲノム医学による先制医療に向けた基盤構築事業 －ながはまモデルによるゲノム・環境情報統合研究コンソーシアム－	継続	基幹経費化
薬学研究科	プロジェクト	化学・生物学分野融合による価値創造型創業研究拠点の構築 －薬・工・医連携創薬テクノロジーイノベーションプロジェクト－	継続	

大学の
動き

部局名	区分	事項（事業）名	新規/ 継続	備考
ウイルス・再生医科学研究所	プロジェクト	多階層生命システム創生研究 —共同利用・共同研究拠点を見据えたイノベーションの開拓—	継続	
ウイルス・再生医科学研究所 霊長類研究所	プロジェクト	新興ウイルス感染症の起源と機序を探る国際共同先端研究拠点	継続	
霊長類研究所	プロジェクト	人間の進化の霊長類的基盤に関する国際共同先端研究の戦略的推進 —人間の本性と心の健康を探る先端研究—	継続	
iPS細胞研究所	プロジェクト	iPS細胞研究拠点形成事業 —iPS細胞の早期実用化への取り組み—	継続	
事務本部（企画・情報部）	プロジェクト	京都大学附置研究所・センター群の連携強化によるイノベーション創出プロジェクト	継続	基幹経費化
戦略②：学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す国際通用性の高い教育システムの構築				
理学研究科	プロジェクト	数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム	継続	
情報学研究科 事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター））	プロジェクト	学部・大学院共通情報教育の革新と教育情報化によるグローバル人材の育成	継続	基幹経費化
高等教育研究開発推進センター	プロジェクト	ICT（情報コミュニケーション技術）を活用した教育の国際化とエビデンスデータに基づいた教育改革のための支援基盤強化	継続	
事務本部（教育推進・学生支援部）	プロジェクト	高大接続型「京都大学特色入試」の導入及びアドミッション・オフィス機能の強化	継続	
戦略③：世界標準の教育研究環境の構築と多様なグローバル人材育成				
事務本部（教育推進・学生支援部）	組織整備	京大グローバルアカデミー構想 ～我が国のグローバル化エンジンの機能を目指して～	継続	基幹経費化
法学研究科	プロジェクト	国際競争力・貢献力ある法学研究者養成拠点の形成	新規	基幹経費化
文学研究科 経済学研究科	プロジェクト	世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成 —京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム—	継続	基幹経費化
医学研究科	プロジェクト	地域連携医薬コンソーシアムの形成による高度研究支援促進と研究支援人材育成事業	継続	
アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究資料センター	プロジェクト	海外拠点の機能強化による「アジア・アフリカ地域対応の高度グローバル人材育成」事業	継続	
地球環境学 工学研究科 農学研究科 人間・環境学研究科	プロジェクト	海外サテライト形成による ASEAN 横断型環境・社会イノベーター創出事業	継続	

大学の
動き

部局名	区分	事項(事業)名	新規/継続	備考
国際高等教育院	プロジェクト	グローバル化に対応した教学マネジメントのための組織改革 ～国際高等教育院の設置及び学部等のグローバル化の推進～	継続	基幹経費化
戦略④：グローバル化に対応した産官学連携及び最先端で質の高い医療の開発・提供等による社会貢献事業の推進				
医学研究科	組織整備	組織再編による多様な高度医療専門職人の養成 －医学物理士・臨床研究管理者・医療ビッグデータサイエンティスト等の養成－	新規	
医学部附属病院	プロジェクト	がん治療を最適化する革新的個別化医療の実現 －がんゲノム情報と時系列臨床情報からなる医療ビッグデータ解析に基づく個別化医療基盤構築事業－	継続	基幹経費化

【参考】機能強化の取組構想 イメージ図

ビジョン＝将来構想(WINDOW構想)			
総長のリーダーシップによる学内改革の推進 ・教育研究組織改革(学域・学系制の導入、研究連携基盤)・人事・給与システムの弾力化(年俸制、クロスアポイントメント制度の導入) ・IRを活用した大学運営・特色入試の実施等			
第3期における機能強化の方向性(重点支援③)に応じた取組			
【戦略①】 独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出	【戦略②】 学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す国際通用性の高い教育システムの構築	【戦略③】 世界標準の教育研究環境の構築と多様なグローバル人材育成	【戦略④】 グローバル化に対応した産官学連携及び最先端で質の高い医療の開発・提供等による社会貢献事業の推進
<p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国際共著論文数の増加状況(H27年:2,306本→H30年:2,500本) ●国際的に評価の高いジャーナル(TOP5%)への掲載論文数の増加状況(H27年:721本→H30年:800本) ●異分野共著論文数の増加状況(H27年:2,492本→H30年:3,000本) ●人文社会分野のジャーナルへの掲載論文数の増加状況(H27年:505本→H30年:550本) ●科学研究費助成事業採択の向上状況(H26年度:494件→H30年度:543件)※基盤研究(S-A-B-C)新規採択件数 ●研究支援充実のための専任職員の増加状況【URA】(H26年度末:40人→H33年度末:50人) ●外国語力基準を満たす専任職員【H26年度末:77人→H33年度末:120人】 ●共同研究・受託研究実施件数・金額の増加状況(第2期平均:824件・4,183百万円→H33年度:1,030件・6,275百万円) 【受託研究】(第2期平均:881件・16,627百万円→H33年度:1,101件・24,941百万円) ●若手研究者の海外派遣者数の増加状況(H27年度:1,484人→H33年度:1,800人) ●未踏科学への取組等の推進状況(H27年度末:40件→H33年度末:40件以上)※異分野融合によるユニット等の組織数 <p>【主な学内の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣事業(ジョン万プログラム) ・次世代研究者育成支援(白眉プロジェクト) ・研究支援体制の整備(URA) ・高等研究院の設置 <p>【主な補助金の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究大学強化促進事業 <p>【重点支援の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 関連する教育研究組織整備・プロジェクト 	<p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●インターネットを活用したデジタル教材数の増加状況【OCW】(H26年度末:535件→毎年度新たに50件増加) 【MOOCs】(H26年度末:1件→毎年度新たに2件開講) ●学部における科目ナンバリングの導入状況(H27年度末:7.5%→H29年度以降:100%) ●部局横断型の教育プログラムの実施状況(H27年度:64科目→H28年度以降:64科目以上) ●履修証明プログラム数の増加状況(H27年度末:3件→H33年度末:6件) ●アクティブラーニングの手法を取り入れた少人数による課題探求型科目数の増加状況(H27年度:197科目→H28年度以降:300科目)※ILASセミナー数 ●特色入試による入学者数の増加状況(H28年度:81人→第3期末までに増加) <p>【主な学内の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試制度改革(特色入試)の実施 ・OCW、MOOCs等ICTを活用した教育の充実 ・国際高等教育院附属国際学術言語教育センター(i-ARCC)による言語教育 <p>【主な補助金の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博士課程教育リーディングプログラム <p>【重点支援の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 関連する教育研究プロジェクト 	<p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学士課程1・2年次を対象とする英語による基礎・教養科目の増加状況(H26年度:134科目→H33年度:400科目) ●外国人教員数の増加状況(H25.5.1:139人→H28.10月末:282人、第3期中この水準を維持) ●国際共同学位プログラム「ジョイント/ダブルディグリープログラム」の増加状況(H26年度末:7件→H33年度末:14件) ●外国人留学生受入数の増加状況(H26年度:2,441人→H33年度:3,300人) ●中長期及び短期の海外留学生者数の増加状況(H26年度:1,517人→H33年度:1,600人) ●大学間学術交流協定締結校数の増加状況(H26年度末:142校→H33年度末:200校) ●国際共同研究の推進状況(H26年度:972件→H33年度:1,050件)※共同研究を目的とした中長期の海外派遣/受入件数 <p>【主な学内の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣事業(ジョン万プログラム) ・海外全学拠点の設置 <p>【主な補助金の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーグローバル大学等事業 ・博士課程教育リーディングプログラム <p>【重点支援の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 関連する教育研究組織整備・プロジェクト 	<p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●海外企業・政府機関等との共同研究・受託研究の実施件数・金額の増加状況(第2期平均:22件・60,500千円→H33年度:33件・121,000千円) ●知的財産収入額の増加状況【特許】(第2期平均:261,595千円→H33年度:392,392千円) 【著作・マテリアル】(第2期平均:27,154千円→H33年度:40,730千円) ●本学の研究成果を活用したベンチャー企業数の増加状況(第2期中:25社→第3期中:新たに40社) ●がんゲノム情報と時系列臨床情報の統合ビッグデータ構築による登録症例数の増加状況(H27年度末:0件→H33年度末:500件) ●ゲノム医療の社会実装のための新たなガイドライン等の作成状況(H27年度末:0件→H33年度末:ガイドライン10件、標準作業手順書20件) ●先進医療・先端医療の新規実施件数の増加状況(H27年度末:17件→H33年度末:27件) ●オープンアクセスの推進に伴う京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」への論文登録数の増加状況(H27年度末:141,686件→H33年度末:20万件) <p>【主な学内の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学発ベンチャー育成事業 ・国内外の企業や研究機関との組織対応型包括連携協定の締結 ・京都・大学キャンパス計画 <p>【主な補助金の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活力ある生涯のためのLast 5X「バ・ジョ」拠点 ・KYOTO未来創造拠点整備事業 <p>【重点支援の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 関連する教育研究組織整備・プロジェクト

共通政策課題分：

以下、33件が採択されました。

部局名	事項（事業）名	新規/ 継続	備考
全国共同利用・共同実施分 【拠点認定に伴う経費】			
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際グローバル研究拠点形成	継続	
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	継続	
ウイルス・再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続	
ウイルス・再生医科学研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業	継続	
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点活動の強化	継続	
生存圏研究所	生存圏科学の共同利用・共同研究拠点機能の強化	継続	
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	継続	
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す国際連携型全国共同研究	継続	
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	継続	
数理解析研究所	数理解析共同研究と滞在型共同研究の推進	継続	
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	継続	
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	継続	
東南アジア地域研究研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	継続	
東南アジア地域研究研究所	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続	
放射線生物研究センター	放射線分子生物学の研究推進拠点	継続	
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	継続	
野生動物研究センター	生息地保全と環境教育を振興する野生動物研究に関する国際研究拠点	継続	
全国共同利用・共同実施分 【プロジェクト分】			
経済研究所	先端政策分析研究推進事業（第Ⅲ期） —エビデンスベース・ポリシーの推進により豊かな生活を実現する新経済社会システムの構築—	新規	
化学研究所	統合物質創製化学研究推進機構	継続	
化学研究所 エネルギー理工学研究所 生存圏研究所	グリーンイノベーションに資する高効率スマートマテリアルの創製研究 —アンダーワンルーフ型拠点連携による研究機能と人材育成の強化—	継続	
エネルギー理工学研究所	革新的高効率太陽光利用技術の開発 —ゼロエミッション文明への変革を加速する—	継続	
生存圏研究所	生存圏科学の国際化とイノベーション強化	継続	
基礎物理学研究所	重力物理学の国際拠点形成	継続	
数理解析研究所	最先端数学の研究力を強化する新しい幾何学の創造 —数学における主導的地位の確立—	継続	

大学の
動き

部局名	事項（事業）名	新規/ 継続	備考
原子炉実験所	量子ビームと核科学の革新的複合利用による先端物質科学・分析研究拠点の構築	継続	
東南アジア地域研究研究所	日 ASEAN 協働による超学際生存基盤研究の推進	継続	
事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター）） 文学研究科 教育学研究科 法学研究科 経済学研究科 人間・環境学研究科 情報学研究科 人文科学研究所 経済研究所 東南アジア地域研究研究所 こころの未来研究センター	エビデンス・ベース社会の構築に向けた人文社会科学の学際融合・最先端研究人材養成事業 ーニーズからシーズへー	継続	
教育関係共同実施分			
農学研究科	次世代の農と食とエネルギーを創るグリーンエネルギーファーム教育拠点	新規	
フィールド科学教育研究センター	黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点整備事業	継続	
フィールド科学教育研究センター	日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点形成事業	継続	
フィールド科学教育研究センター	人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点	継続	
資料の保存・修復等分			
附属図書館	京都大学附属図書館所蔵「富士川文庫」保存・公開のための修復・電子化事業 ーわが国の医学の歴史を俯瞰する研究基盤構築のためにー	継続	
数理・データサイエンス教育強化経費			
事務本部（教育推進・学生支援部）	数理・データサイエンス教育強化経費	新規	

3. 病院特別医療機械設備（財政投融资設備）

部局名	事項（事業）名
医学部附属病院	周術期患者管理システム

大学の
動き

4. 施設整備費

団地等名	事業名	構造・階面積	備考
吉田	ライフライン再生（ガス設備等）	-	継続（後年度負担分） 【28-29 国債】（2 年計画の 2 年目）基幹・環境整備
医病	総合高度先端医療病棟（Ⅱ期）等	-	継続（後年度負担分） 【27-31 国債】（5 年計画の 3 年目）総合高度先端医療病棟（Ⅱ期）・iPS 等臨床試験センター
桂	総合研究棟Ⅴ，福利・保健管理棟施設整備事業（PFI 事業 13-13）	-	継続（後年度負担分）
吉田	総合研究棟改修（農学部総合館）施設整備等事業（PFI 事業 13-12）	-	継続（後年度負担分）
吉田	総合研究棟施設整備事業（PFI 事業 14-14）	-	継続（後年度負担分）
桂	総合研究棟Ⅲ（物理系）等施設整備事業（BOT）（PFI 事業 12-6）	-	継続（後年度負担分）
桂	図書館	R3-1 4,470㎡	新規【要望】 【29-31 国債】（3 年計画の 1 年目）サイエンス・メディア棟（Ⅰ期）
宇治	ライフライン再生（ガス設備）	-	新規【要望】 【29-30 国債】（2 年計画の 1 年目）基幹・環境整備
吉田	総合研究棟（医薬系）（PFI 事業 13-1）	-	新規
医病	基幹・環境整備（シールドルーム整備等）	-	新規 【29-31 国債】（3 年計画の 1 年目）基幹・環境整備

（財務部（財務課））

[目次に戻る ↗](#)

京都大学 重点戦略アクションプラン（2016-2021）
（第 2 版）着手事業

事業名	着手年度
Wild and Wise	
ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業 —日本人学生と外国人留学生が共に学ぶ場としての短期プログラム創設—	28 年度
Go! Research, Learning & Language Program (GoRiLLa) ゴー！ リサーチ, ラーニング & ランゲージプログラム (ゴリラプログラム)	28 年度
京都大学ジャパングートウェイ構想推進支援事業	28 年度
京都大学吉田カレッジ構想	29 年度
京都大学大学院共通教育実施事業	29 年度

大学の
動き

事業名	着手年度
International and Innovative	
戦略的情報発信の推進事業	28年度
全学海外拠点（グローバル人材育成：ジョン万プログラム（職員））展開事業	28年度
国際学術ネットワーク強化推進事業	28年度
国際化業務推進強化事業	28年度
戦略的広報を通じた国際競争力強化事業	28年度
国際性豊かな環境整備事業	28年度
オープンアクセス推進事業	28年度
研究支援体制高度化事業	28年度
研究活動推進事業	28年度
次世代研究者育成支援事業	28年度
先導的研究拠点形成事業	28年度
臨床研究拠点における支援体制の強化	28年度
Natural and Noble	
利益相反マネジメント推進事業	28年度
KUINS ネットワークの館内・末端SWの更新事業	29年度
施設・環境マネジメント推進事業	28年度
桂キャンパス整備事業	28年度
Diverse and Dynamic	
留学生等宿舎整備事業	28年度
障害のある学生への支援体制強化事業	29年度
IRを活用した大学運営に向け必要となる体制等の強化	29年度
教学運営を支える教育情報活用（教育IR）推進事業	28年度
Original and Optimistic	
経済的學生支援強化事業	28年度
博士後期課程学生 特定研究学生制度（仮称）の創設	29年度
「高大接続改革実行プラン」を視野に入れた、高大接続事業及び入学者選抜方法の検討を行う「高大接続・入試センター」の設立並びに強化	28年度
京都大学基金寄付募集活動推進事業	28年度
全学同窓会支援・卒業生連携強化のための推進事業	28年度
Women and Wish	
男女共同参画推進事業	28年度

（財務部（財務課））

[目次に戻る ↗](#)

第3回JASTIPシンポジウムを開催

「日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点-持続可能開発研究の推進」(JASTIP)は、バンコクにおいて、「第3回JASTIPシンポジウム-Japan-ASEAN STI Collaboration for SDGs-」を2月5日(日)に開催し、タイと日本からの参加者を中心にASEAN主要6カ国、日本および中国の計8カ国から約100名の参加がありました。

今回のシンポジウムは、タイ国立科学技術開発庁(NSTDA)、インドネシア科学院(LIPI)、マレーシア日本国際工科院(MJIIT)と共催し、文部科学省およびAZ Science Thailand Co.,Ltd.からの後援を受け開催されました。

本シンポジウムでは、JASTIPの各研究拠点のこれまでの活動内容を踏まえて、日ASEANの協力により既存の研究分野を超えた連携や産学連携をどのように進めていけばよいのか、日ASEANの科学技術イノベーション(STI)協力の基盤としてこのプラットフォームをどのように強化していけばよいのかを、日ASEANの関係者や有識者と議論し、質疑応答や総合討論を通じJASTIPの今後の活動の指針となる多くの示唆を頂戴するとともに、ポスター発表により、日ASEANの個々の研究者が直接対話し、新たな日ASEANの科学技術協力強化の場となったと確信しています。

【関連リンク】

JASTIP(日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点)

<http://jastip.org/>

<http://jastip.org/en/>



シンポジウムの様子



閉会の挨拶をするエニー スガルモノワティ インドネシア科学院副長官

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る ↗](#)

平成29年度一般入試（前期日程）合格者数

学部			募集人員	受入予定数(目安)	合格者数
総合人間学部	前	期	117		121
	文 理	文 系	63		65
		理 系	54		56
文学部	前	期	210		212
教育学部	前	期	54		55
	文 理	文 系	44		44
		理 系	10		11
法学部	前	期	300		311
経済学部	前	期	211		221
	文 理	文 系	183		193
		理 系	28		28
理学部	前	期	306		311
医学部	前	期	180		192
医学科	前	期	105		111
人間健康科学科	前	期	75		81
薬学部	前	期	78		84
薬科学科	前	期	48		53
薬学科	前	期	30		31
工学部	前	期	947		946
地球工学科※	前	期		182	176
建築学科	前	期		80	81
物理工学科	前	期		235	236
電気電子工学科	前	期		127	128
情報学科	前	期		90	91
工業化学科	前	期		233	234
農学部	前	期	284		290
前期合計			2687		2743

地球工学科の合格者には、外国人留学生を対象とした国際コースの入学手続者8人を除きます。

◎外国学校出身者のための選考

学部・学科	募集人員	合格者数
法学部	10人以内	5
経済学部	10人以内	7

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)



寄附講座、寄附研究部門の設置、更新

創薬医学講座（新設）	
1. 部局名	医学研究科
2. 名称 (英名)	創薬医学講座 (Department of Drug Discovery)
3. 寄附者	大日本住友製薬株式会社, 小野薬品工業株式会社, 田辺三菱製薬株式会社, 杏林製薬株式会社
4. 寄附金額	総額 340,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 32 年 3 月 31 日
6. 担当教員	寄附講座教員 (特定教授) 鶴山 竜昭 寄附講座教員 (特定教授) 櫻井 武 寄附講座教員 (特任教授) 成宮 周 寄附講座教員 (特定准教授) 藤本 明洋 寄附講座教員 (特定助教) 網代 将彦 寄附講座教員 (特定助教) 平塚 拓也
7. 設置目的	基礎から探索臨床までの広範かつ高度な医学知識・医学研究能力に加え製薬科学, regulatory science と知財・起業学を修得した創薬医学研究者の養成と医学に基づく創薬手法に関する研究を行う。
8. 活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 基礎から探索臨床までの広範かつ高度な医学知識・医学研究能力に加え製薬科学, regulatory science と知財・起業学を修得した創薬医学研究者の養成手法の研究。 医学に基づく創薬手法に関する研究。

免疫ゲノム医学講座（新設）	
1. 部局名	医学研究科
2. 名称 (英名)	免疫ゲノム医学講座 (Department of Immunology and Genomic Medicine)
3. 寄附者	小野薬品工業株式会社
4. 寄附金額	総額 200,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 32 年 3 月 31 日
6. 担当教員	寄附講座教員 (特任教授) 本庶 佑 寄附講座教員 (特定准教授) Begum, Nasim Ara 寄附講座教員 (特定准教授) 小林 牧 寄附講座教員 (特定講師) 茶本 健司
7. 設置目的	AID によって RNA 編集をうける miRNA を固定し, これに対してどのような仕組みで変異が行われるのかを明らかにする。さらに様々な miRNA が B リンパ球の分化においてどのような役割をしているかを追求する。また, リンパ球の分化制御に関わるサイトカインの発現制御においても多くの miRNA が関わっていることからこれらの仕組みについても明らかにする。さらに AID によって引き起こされるゲノム不安定性から由来するがん化の仕組みについてその分子機構を解明し, その予防方法を開発する。PD-1 分子は免疫系のブレーキ役としての役割がますます広く認識され, PD-1 の阻害による免疫賦活化を用いた癌の治療や PD-1 の活性化により自己免疫病治療などへの展開等に大きな期待がかかり, この研究を進める。



8. 活動内容	<p>医学教育の中で、発がんのメカニズムならびにがん免疫療法の仕組みとその理解は、今後の医師として極めて重要な基本的教育のカリキュラムに入れられるべきである。当講座は分子生物学的な側面から免疫学の基本原理を教育するとともに、遺伝子異常に基づく発がんの仕組み、遺伝子変異に基づく免疫系の多様化の仕組みを合わせて教育する。</p> <p>AIDによるmiRNA前駆体のRNA編集のしくみを明らかにし、これに起因するリンパ球の分化制御とがん化のしくみの解明。</p> <p>免疫系の負の制御因子PD-1に関しては、臨床応用への展開が期待されており、PD-1のヒト型抗体もしくはPD-1可溶性分子の投与によって免疫賦活癌治療法の開発が期待され、逆にPD-1を活性化するPD-L1, PD-L2のligand投与により免疫制御療法が可能となる。これらの方向を目指した基礎的また探索臨床的な研究の展開。</p>
---------	---

免疫ゲノム医学講座（新設）

1. 部局名	医学研究科
2. 名称 (英名)	先端糖尿病学講座 (Department of Advanced Diabetology)
3. 寄附者	武田薬品工業株式会社
4. 寄附金額	総額 90,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日
6. 担当教員	寄附講座教員 (特定准教授) 矢部 大介 寄附講座教員 (特定助教) 小倉 雅仁
7. 設置目的	膵β細胞の機能や量の制御メカニズムについて、特に糖尿病状態や加齢に伴う変化に焦点をあてて解明し、糖尿病の新たな診断法や治療法の開発につながることで、国民の健康寿命の延伸に寄与する。
8. 活動内容	特に糖尿病状態や加齢に伴う変化に焦点をあて、メタボロミクスやプロテオミクス、トランスクリプトミクス、エピジェネティクス等の多様な手法を駆使することで糖尿病の治療や予防につながる創薬標的となる膵β細胞の代謝経路や分子標的を同定し、新規の早期診断法や治療法の開発を目指すような、膵β細胞研究に特化した先端研究を目指す。

管理会計（サンフロンティア不動産）講座（新設）

1. 部局名	経営管理研究部
2. 名称 (英名)	管理会計（サンフロンティア不動産）講座 (Management Accounting Endowment Research Center (Sun Frontier Fudousan))
3. 寄附者	サンフロンティア不動産株式会社
4. 寄附金額	総額 30,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 3 月 31 日
6. 担当教員	寄附講座教員 (特命教授) 吉永 茂 寄附講座教員 (客員教授) 丸田 起大 寄附講座教員 (特定助教) 市原 勇一
7. 設置目的	管理会計とそれに関連する分野の高度な研究とその実務への応用、および専門家として活躍できる人材の教育を促進する。
8. 活動内容	管理会計や経営理念といったマネジメントコントロールシステムの研究領域においてリーダーシップを發揮してきた研究者と、管理会計を中心とする経営管理システムの設計・運用の最前線を切り拓いてきた実務者との協力関係を土台に研究・教育活動を遂行する。



災害リスクマネジメント工学 (JR 西日本) 講座 (更新)	
1. 部局名	工学研究科
2. 名称 (英名)	災害リスクマネジメント工学 (JR 西日本) 講座 (Disaster Risk Management Engineering (WEST JR))
3. 寄附者	西日本旅客鉄道株式会社
4. 寄附金額	総額 90,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日 (平成 25 年 4 月 1 日設置)
6. 担当教員	寄附講座教員 (特定教授) 杉山 友康 寄附講座教員 (特定准教授) 伊豫部 勉
7. 設置目的	本講座のこれまでの研究を踏まえ、今後、鉄道などの事業者としては、避難などのソフト対策を含む減災や早期復旧・復興などに有効な多面的な防災対策が必要であることから、今回、本講座の設置期間を更新し、これまでの研究成果の深度化を図り、設置内容に沿った研究を行う。また、本研究成果を公開講座・セミナー等で一般社会に広く還元することで、より安全な市民生活の実現に貢献する。
8. 活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害 (巨大地震, 大津波, ゲリラ豪雨, 強風, 雪害等) におけるリスクマネジメントに関する研究 ・災害時の情報伝達, 避難等のソフト対策に関する研究 ・防災インフラの管理に関する研究

「農林中央金庫」次世代を担う農企業戦略論講座 (更新)	
1. 部局名	農学研究科
2. 名称 (英名)	「農林中央金庫」次世代を担う農企業戦略論講座 (The Norinchukin Bank Innovative Research for Farm Governance and Management)
3. 寄附者	農林中央金庫
4. 寄附金額	総額 15,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日 (平成 24 年 4 月 1 日設置)
6. 担当教員	寄附講座教員 (特定准教授) 坂本 清彦 寄附講座教員 (特定助教) 川崎 訓昭
7. 設置目的	今後の担い手たる多様な個別農業経営体や関連産業主体に焦点を当て、それらの体質強化や当該主体を含む地域社会の活性化に資する諸方策を、そこに関わる多様な人材の確保・開発・育成と個別農業経営体の実践的有り様とを踏まえつつ、地域産業クラスター等の地域・産業ネットワークをベースに多面的な角度から研究し、実践的な手法確立と若手人材育成を目指す。
8. 活動内容	本寄附講座は、農業経営の現場に軸足を置くスタンスでの研究を伝統としてきた京都大学の農業経営研究を背景に、そのような具体的要請に対して、そこに関わる多様な人材の確保・開発・育成 (経営者個人のキャリア形成視点も取り入れながら) を重視しつつ、かつ個別ガバナンス (ファミリー・ガバナンス及びコーポレートガバナンス) 下における一定の方向性を持った個別農業経営体の実践的有り様 (財務・投資戦略を含む) を踏まえ、地域産業クラスター (六次産業化, 農商工連携含む) 等の地域・産業ネットワークをベースに多面的な角度から研究しようとするものである。

部局の
動き

道路アセットマネジメント政策（橋梁調査会）講座（更新・名称変更）	
1. 部局名	経営管理研究部
2. 名称（英名）	道路アセットマネジメント政策（橋梁調査会）講座 (Road Asset Management Policy Chair (Japan Bridge Engineering Center (J-BEC)))
3. 寄附者	一般財団法人橋梁調査会
4. 寄附金額	総額 90,000,000 円
5. 設置期間	平成 28 年 4 月 1 日 ～ 平成 31 年 3 月 31 日 (平成 25 年 4 月 1 日設置)
6. 担当教員	寄附講座教員（特定教授） 1 名 寄附講座教員（客員准教授） 1 名
7. 設置目的	道路管理等の道路政策の一環として、今後のより高度で効果的・効率的なアセットマネジメントの立案及び実施方策に関して研究を行う。
8. 活動内容	橋梁事業の円滑な発展を図ることによって国民経済の発展と国民生活の向上に寄与することを目的とした、公共の実務に携わる財団法人からの寄附に基づくという特徴を踏まえ、道路管理等の道路政策の一環として、今後のより高度で効果的・効率的なアセットマネジメントの立案及び実施方策に関して研究を行う。

[目次に戻る ↗](#)

ウイルス・再生医科学研究所開設記念式典・シンポジウム・祝賀会を挙行

ウイルス・再生医科学研究所は、新研究所開設を記念し、平成 28 年 12 月 21 日（水）に芝蘭会館稲盛ホール・山内ホールで、記念式典およびシンポジウム、祝賀会を開催しました。

記念式典では、開 祐司 ウイルス・再生医科学研究所長の開会挨拶、山極壽一 総長の挨拶に続き、牛尾則文 文部科学省研究振興局学術機関課長、松浦善治 国立大学附置研究所・センター長会議会長・大阪大学微生物病研究所長から祝辞が述べられました。

続いて記念シンポジウムでは、阿曾沼明裕 名古屋大学教育発達科学研究科教授による「大学の研究所のゆくえ-附置研究所の在り方を探る-」、遊佐宏介 ウェルカムトラストサンガー研究所グループリーダーによる「CRISPR-Cas9システムを用いた順遺伝学的遺伝子探索法の開発と応用」、巖佐 庸 九州大学理学研究院教授による「数理科学は生命科学の推進にどのように貢献できるか」の三つの講演が行われました。

記念シンポジウム後に開催した祝賀会では、湊 長博 理事・副学長の乾杯の挨拶のあと、



左から、開所長、山極総長、牛尾課長、松浦会長

部局の
動き



左から、阿曾沼教授，遊佐グループリーダー，巖佐教授

上本伸二 医学研究科長，水内 享 エネルギー理工学研究所長，ウイルス研究所と再生医科学研究所の歴代所長から祝辞が述べられました。最後に，小柳義夫 ウイルス・再生医科学研究所副所長から閉会の挨拶があり，盛会のうちに記念事業は閉会となりました。

(ウイルス・再生医科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

東南アジア地域研究研究所が発足

1月1日(日)に東南アジア研究所と地域研究統合情報センターを統合し，東南アジア地域研究研究所を設置しました。1月4日(水)に新研究所設置記念除幕式を行い，関係教職員等が参列する中，湊 長博 理事・副学長，河野泰之 東南アジア地域研究研究所長，原 正一郎 同副所長など6名が除幕を執り行いました。

新研究所は，50年以上の歴史ある東南アジア研究所の伝統を継承しつつ，学术界を超えた研究ネットワークを開拓し，東南アジアを中心とする地域研究の国際研究拠点として，国内外において先導的な役割を果たすべく，複雑化する地球規模の諸課題に地域社会の現場から取り組んでいきます。



新研究所の銘板

除幕式の様子
(左から Nathan Badenoch 准教授，原副所長，河野所長，湊理事・副学長，設楽成美 助教，Mynt Thida 招へい研究員)



(東南アジア地域研究研究所)

[目次に戻る ↗](#)

昔の授業と今の授業

二間瀬 敏史



私は昨年4月、京都産業大学の理学部に新設された宇宙物理・気象学科に赴任することになり、1979年に京大工学部航空工学修士課程を修了して以来、37年ぶりに京都で生活を始めました。それまで弘前大学理学部物理学科に7年、東北大学大学院理学研究科天文学専攻に21年在籍し、一般相対性理論や宇宙論の研究を行ってきました。大学院は工学部でしたが学部は理学部で卒業証書には主に宇宙物理学を修めたということになっています。当時、宇宙や天文の研究者がそろっている大学は京大、国立天文台、東大、東北大、北大くらいのもので、あとはいくつかの私大に一人いる程度のものでした。そのなかでも特に京大は宇宙物理学教室以外にも理学部物理第二教室に天体核研究室があり林忠四郎先生が大きなグループを率いられており、人材の宝庫でした。実際、この分野はこの30数年間にある程度大きな大学には複数の宇宙・天文関係の研究者が在籍するまでに成長しましたが、それには天体核出身者が大きな寄与をしています。修士課程で私の指導教官だった松田卓也先生も天体核出身で、そういう意味では私も天体核につながっているともいえるかもしれません。

さて私は修士課程を修了後ウェールズにあるカーディフ大学の応用数学天文学学科の博士課程に進学し、博士号を取得した後は数年間、ドイツ、アメリカなどポストドクを経験した後、日本に戻ってきました。その後の経歴を上述のとおりですので、ずっと外から京大をみてきたことになります。海外にいるときは教養部解体という日本の大学の大きな変わり目で各大学が右往左往しているのを横目で眺めながら研究だけの生活をエンジョイしていました。日本に戻ってからは、研究、研究指導、授業に追われ、文科省のCOEプログラムに付き合い、人並みに忙しい時間を過ごしてきました。研究指導、授業をするようになってから、自分が京大生だった頃の授業をよく思い出します。だいたい今の大学院生は外国の研究会に行くのが当たり前で恵まれているなというひがみ半分の思いですが、自由な京大ということでこの場をかりてあまり大っぴらにはいえない思いを述べてみたいと思います。それは10年前くらいからの風潮でしょうか、授業、より一般に教育に対する世の中の流れです。大学ですらとにかく丁寧に手取り足取り分かりやすく落ちこぼれがないように教えるのが当たり前という流れです。それでどうなったかといえば、個人的な印象では学生の学力がどんどん下がっていていると思っています。私が学生だった頃はあくまで印象ですが、結構、「そんな丁寧には教えてくれなかった」（当時の先生方すみません）授業がかなり（ほとんど？）あったように思います。かといってそれが悪いとは全く思いません。むしろ良かったときえ思っています。というのは易しく教えられることで授業だけで分かったような気分になってもらっては困るからです。数学や物理などは易しく教えるとかえって逆効果なのは、大学の授業は半分分らないくらいがちょうどいいのではと実は思っているのです。

今でも京大には半分分らないような授業があって、それを面白がるような京大生が今でも多くいることを期待しています。

（ふたませ としふみ、京都産業大学理学部教授
昭和52年理学部卒業 昭和54年工学研究科修士課程修了）

[目次に戻る ↗](#)

随想

火山にかかわる誤解

名誉教授 石原 和弘



近年のスマートホンやライブカメラ、ドローンなどの普及によって、噴火や火口の映像がインターネットやテレビで即時的に流れるとともに、2014年9月の御嶽山噴火の惨事もあって、以前に比べると火山と噴火予知に関心が高まったように思います。テレビや新聞などで様々な意見や解説がなされていますが、日々火山の動きを観察してきた私には、事実誤認や思い込み、迷信の類も多いように思います。私見を紹介させていただきます。

大地震が起きると、強震動や断層運動による歪変化がマグマ溜まりやマグマを刺激して噴火を引き起こすといった説があります。著名な地震学者や火山学者が解説するので、多くの人々が信じているようですが、実際にはどうでしょう。

確かに、2011年3月11日のマグニチュード9の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）により東日本の火山周辺でも顕著な歪変化が発生、多くの火山で一時的に地震活動が活発化し、富士山などいくつかの火山ではマグニチュード4～6クラスの有感地震が発生しました。ところが、2014年に噴火した御嶽山では地震活動の活発化は認められませんでした。また、有感地震が起きた火山の多くは5年過ぎた今も沈黙を保っています。

一方、火山活動とはいえば、東日本大震災の1ヶ月余前に約300年ぶりの本格的なマグマ噴火が発生した霧島・新燃岳に続いて2013年には西之島、2014年には口永良部島、御嶽山、阿蘇山と、それぞれ数10年ぶりの噴火を開始しました。御嶽山を除けば、巨大地震の震源から1000km以上離れています。震源に近い火山ではなく、遠い火山が噴火するというのも不思議なことです。「大地震が火山噴火を誘発する」は迷信であると断じるのは言い過ぎでしょうか。

また、有感地震が多発して数日で噴火する有珠山などの例から、「火山噴火予知は地震予知に比べ簡単である」と信じている人が多いようですが、全くの誤解です。

多くの火山はマグニチュード1以下の微小地震の発生頻度の増減、ごく小さな噴火や噴気活動の活発化を幾度か繰り返したのちに、地震の急増といった明瞭なサインなしに噴火します。最近の新燃岳、口永良部島、御嶽山がその例です。それゆえに、米国、イタリアやインドネシアなどの代表的活火山では、専門家や観測員が現地に駐在し、計器観測と併せて種々の調査を行って火山の挙動を見守っています。残念ながら、日本では、公務員定員削減や行政効率化のもと火山に隣接する測候所が廃止されました。

2007年に導入された気象庁の噴火警報や噴火警戒レベルを噴火の規模や時期を言い当てる「予知」と曲解している人も多いようです。

犠牲者が出た噴火の多くは前兆が捉えにくく、予測しがたい小規模な噴火です。しかも、遠方から登山や観光で訪れた人々が火口近くで噴火に遭遇する例が多く見られます。「火山活動は異常な状態が続いている」ことを周知し、火山と適当な間合いを保つことにより人的被害を防止することがその目的です。極論すれば、気象庁職員も国民も、噴火予知が困難なゆえに噴火警報が導入されたと認識すべきであると考えます。

(いしはら かずひろ, 平成24年退職 元防災研究所教授 専門は火山物理学)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

稲葉カヨ 理事・副学長が紺綬褒章を受章

稲葉カヨ 理事・副学長に紺綬褒章が授与され、2月10日（金）に徳賀芳弘 副学長より伝達されました。

紺綬褒章とは、公益のために私財を寄付した者に授与される褒章で、1918（大正7）年に制定されました。授与基準は寄付金額500万円以上とされています。

稲葉理事は、免疫学研究における優れた業績に対し、平成26年にロレアル-ユネスコ女性科学賞、平成27年に武田医学賞を受賞し、それらの賞金から京都大学基金にご寄付いただいたものです。

「大学の運営に関わる中で、基金の大切さは実感してきた」という稲葉理事。「私の担当である男女共同参画・国際・広報においては、女性研究者の増大のためのインセンティブや枠組みづくり、外国人教員や留学生の受け入れのための宿舍や奨学金制度の充実など、課題は山積みです。それに先立つ資金が必要で、京都大学基金の拡大は欠かせません。そうした思いから、理事・副学長自ら率先して寄付をしようと思いついたわけで、それが今回の受章につながり驚いています」。

最後に、男女共同参画担当として、また女性研究者の先輩として、若手の女性研究者に向けて次のメッセージをいただきました。「しなやかに、たおやかに”いきましょう。壁に一度ぶつかっただけで諦めてしまう人も多いのですが、事はなるようにしかならないし、道は一つではないのだから、いろいろな考え方をして別の方法を探ればいい。とにかく“折れない”でください」。



褒章記を受け取る稲葉理事



徳賀副学長とともに

【略歴】

- 1973年 奈良女子大学理学部卒業
- 1975年 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 1978年 京都大学大学院理学研究科博士課程修了
- 1978年 京都大学研修員（理学部）
- 1978年 京都大学理学部助手
- 1992年 京都大学理学部助教授
- 1995年 京都大学大学院理学研究科助教授
- 1999年 京都大学大学院生命科学研究科教授
- 2003年 京都大学大学院生命科学研究科長
- 2007年 京都大学女性研究者支援センター長
- 2008年 京都大学理事補
- 2013年 京都大学副学長
- 2014年 京都大学理事・副学長

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

話題

宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月4日(水)、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースで新年互礼会が開催されました。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員間の交流を深めることを目的に毎年開催されており、各部局の教職員に加え、事務部職員も加わり、宇治地区の一体感をより高める機会となっています。

開会にあたり、宇治地区世話部局長である渡邊隆司 生存圏研究所長より新年の挨拶があり、続いて、次期宇治地区世話部局となるエネルギー理工学研究所から、水内 亨 同研究所長の



新年の挨拶を述べる渡邊
研究所長



乾杯の音頭をとる水内研
究所長

発声による乾杯の後、出席者は銘々に歓談し、新年を迎えた実感と賑やかな雰囲気の中で盛会のうちに閉会となりました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)



会場の様子1



会場の様子2

国際共同シンポジウム「The Future of the Study of Education – 教育研究の新たな展開 –」を開催

教育学研究科は、国際共同研究や大学院生交換プログラムを進めてきた英国のUCL教育研究所と中国の北京師範大学教育学部と共同で、国際共同シンポジウム「The Future of the Study of Education – 教育研究の新たな展開 –」を、平成28年12月9日(金)に百周年時計台記念館で開催しました。当該大学の研究者や学生に加えて全国から教育関係者など約80名が参加し、南部広孝 教育学研究科准教授の総合司会のもとで、野口由紀子氏が通訳、Jeremy Rappleye (ジェレミー・ラプリー) 教育学研究科准教授が補佐を務めました。

シンポジウムでは、稲垣恭子 教育学研究科副研究科長の挨拶に続き、まず朱 旭東 (Zhu Xudong) 北京師範大学教育学部長・教授が“Knowledge Graphs of Educational Research on China, America and Japan from Chinese Scholars’ Perspectives” (中国における日中米教育研究の知的広がり)と題する講演を行い、中国において3か国を対象とした教育研究のテーマや研究者がどのように分布しているのかを実証的に示したうえで、政策形成の過程でこうした研究が重視されるようになっており、教育研究の拠点がシンクタンクとして機能しつつあることが紹介されました。続いて、Paul Standish (ポール・スタンディッシュ) UCL教育研究所教育哲学センター長・教授が“Science, Humanities and the Rise of Neuroscience” (科学、人文学と、神経科学の台頭)と題する講演を行い、ルネサンス絵画を例に、パースペクティブ(視点)の問題と



講演する朱教授



講演するStandishセンター長

話題

の関わりから科学と人文学の二つの文化を再考しました。そして、急成長を遂げる神経科学研究に対して人文学のもつ妥当性を、脳についての的確な理解には心が作用するホーリスティックな文脈理解が必要であるという観点から例証しました。続いて、齋藤直子 教育学研究科准教授が“Towards an Economy of Beautiful Knowledge”（美しい知識のエコノミーに向けて）と題する講演を行い、「役に立つ知識とは何か」という観点から、人文学の危機の時代におけるアメリカ実践哲学の意義を論じ、「優秀な羊」から「野生のマガモ」の教育への転換を提言しました。

最後に、高見 茂 教育学研究科長より「教育学研究科の展望と将来像」(The Future of the Graduate School of Education)と題し、上記の講演内容を踏まえて、本研究科の多様な研究分野におけるAI研究への応用を一例として紹介しながら、AIを教育するという斬新な観点から今後の本研究科の将来像を提示しました。



講演する齋藤准教授



報告する高見研究科長



会場の様子

記念講演の質疑応答では、教育研究の政策形成への貢献のあり方や、人文学が価値や正当化の問題を考慮する上で特権的な地位をもつという科学と人文学の二つの文化の非対照的な関係性、科学と人文学の双方において教育・研究を維持するための資金の本質的な重要性、またこれに基づく学際的な研究と探究の可能性などが討議され、講演者と聴衆がシンポジウム終了後や懇親会でも熱心に議論を続けました。

同シンポジウムでは、国際的で学際的な討議を通じて、人文学と科学の際に立つ教育研究の意義が改めて問い直されました。それを通じて世界各国における教育情勢の変化を背景にした教育学研究科の今後の構想と、教育研究の新たな展開についての理解を深めることができました。また、今回の国際交流企画では、北京師範大学教育学部とは双方の大学院生が主体的に企画・運営し、共通テーマを発表して議論を深める研究交流会を実施しました。また、UCL教育研究所とは「国際教育研究フロンティアC」を外国の大学院との共同授業という形で開講し、Standishセンター長・教授の英国式ゼミにおいて、同研究所の博士課程



全体討議の様子 (1)



全体討議の様子 (2)

話題



集合写真

学生5名と本学部・研究科の学部生・大学院生が活発に英語で議論し学習する様子がOCWで世界配信されます。これらの諸企画を通じ、異文化間の国際交流に教員と大学院生が共に学習しながら参与する、教育学研究科ならではの国際共同教育プログラムの場が創出され、今後、3大学における更なる連携発展につながる成果が生み出されるにいたりました。

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

第15回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

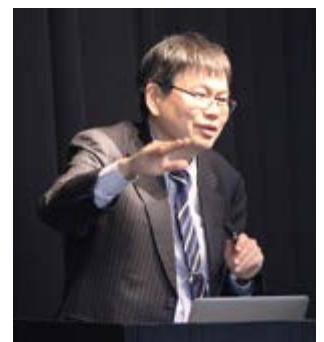
医学部附属病院は、1月19日(木)に第15回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を芝蘭会館で開催しました。同研究会は、医学部附属病院での iPS 細胞、ES 細胞および体性幹細胞などを用いた再生医学研究の向上および成果の普及を図り、医療の発展に貢献することを目的として2009年11月に発足し、今年で8年目となりました。第15回目となる今回の研究会では、学内外から過去最多の180名を超える医療関係者等が参加しました。

研究会では、稲垣暢也 医学部附属病院長の開会挨拶の後、出雲正剛 武田薬品工業株式会社医薬研究本部再生医療ユニットグローバルヘッドが「武田薬品の再生医療への取り組み」について一般講演を行いました。また、吉田善紀 iPS 細胞研究所未来生命科学開拓部門准教授が「多能性幹細胞からの心筋細胞分化成熟誘導法の開発」、後藤慎平 医学部附属病院呼吸器内科特定助教が「ヒト iPS 細胞を用いた呼吸器再生研究の新展開」、金子 新 iPS 細胞研究所増殖分化機構研究部門准教授が「iPS 細胞技術による T 細胞の再生」と題して、それぞれ学術講演を行い、参加者は最新の研究成果について熱心に聞き入りました。

引き続き、岡野栄之 慶応義塾大学医学部医学部長・生理学教室教授が「iPS 細胞技術による神経系の再生と疾患研究」と題した特別講演を行いました。講演後の質疑応答では活発な議論が展開され、研究会は盛会のうちに終了しました。



稲垣病院長による開会挨拶



岡野慶応義塾大学医学部長・教授による特別講演

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

話題

先進医薬研究振興財団より海外留学助成の受領

医学部附属病院 輸血細胞治療部の博士研究員である横田明日美氏が、平成28年11月4日(金)に公益財団法人 先進医薬研究振興財団第34回血液医学分野海外留学助成金(200万円)の受領者に決定し、平成29年1月19日(木)医学部附属病院において同財団の冨修常務理事から表彰を受けました。横田氏は平成29年2月下旬から米国オハイオ州のシンシナティ子供病院医学センター(Cincinnati Children's Hospital Medical Center)において、「骨髓異形成症候群発症メカニズムの解明と新規治療標的の同定」のテーマで研究を開始する予定です。



横田明日美氏



助成金交付認定書

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

第1回思修館の集いを開催

総合生存学館(思修館)では、平成24年度にスタートした「オールラウンド型思修館リーディングプログラム」第1期生が5年生となり、ようやく全学年の学生がそろいました。

そこで、常々思修館の応援団としてご支援いただいている方々をご招待し、この5年間の活動を報告するとともに、学生の活躍をお披露目し交流する機会として「第1回思修館の集い」を2月3日(金)に東一条館にて開催しました。当日は、学外からは、思修館基金へご寄附いただいた方々、「熟議」科目を担当していただいている講師の方々、総合生存学館が実施しているELP(エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム)の受講生の方々など、学内からは、北野正雄 理事・副学長、川添信介 理事・副学長、他のリーディングプログラムコーディネーター、研究指導委託教員、旧教職員、本学館教職員・学生など、あわせて約100名の参加があり、あちらこちらで歓談の輪が広がりました。

まず、第一部の「活動報告会」では、川井秀一 総合生存学館長による開会挨拶ならびに活動報告があり、思修館の紹介と寄附金の使途について説明がありました。続いて、各学年を代表して5名の学



活動報告を行う川井学館長



発表した学生たち(左から、2年パンさん、4年今村さん、5年白石さん、3年周さん、1年塩山さん)

生によるカリキュラムに基づく活動や研究内容、進路についての発表がありました。1年生から5年生まで通しでの発表は、思修館においてどのように学生が育っていくのかがよくわかるものとなりました。

話題

場所を移して、第二部の「懇談会」では、まず船井哲良 船井電機株式会社社長から本学館学生へのメッセージとして、船井会長が書き著された「四十歳で五つの会社の社長になる」という著書の贈呈式がありました。その後、久能祐子 S&R 財団理事長兼 CEO の発声による乾杯で始まった懇談会は、終了予定時刻を過ぎても話が途切れることなく続きました。最後に、森雅彦 DMG 森精機株式会社取締役社長からの参加者を代表してのご挨拶では、今後も思修館を応援し続けるとの力強いメッセージをいただきました。そして、リーディングプログラム代表である北野理事による閉会挨拶でお開きとなりました。

なお、思修館の八思科目の一つである「芸術」を履修している学生による生け花および書道作品が会場を飾り、一角ではお点前が披露され、会場に花を添えるものとなりました。



久能 S&R 財団理事長による
乾杯の発声



乾杯の様子



船井電機岡田取締役（船井会長代理）より著書の贈呈



森社長からのメッセージ



北野理事による閉会挨拶



学生によるお点前の様子

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↩](#)

話題

山極壽一 総長ら京都大学一行がマヒドン大学を訪問

2月3日(金), 山極壽一 総長, 稲葉カヨ 理事・副学長, 藤井滋穂 地球環境学堂教授, 柴山 守 ASEAN拠点所長ら6名の京都大学一行が, マヒドン大学(タイ)を訪問しました。訪問は, まず Udom Kachintorn 学長, Sansanee Chaiyaraj 副学長ら, マヒドン大学要人への表敬から始まりました。ここではそれぞれの大学での国際教育・研究の紹介がされるとともに, 今後の両大学間での協力について活発な意見交換がなされました。その後, 遠隔会議室に移動し, 地球環境学堂と協働プロジェクトを実施しているハノイ理工科大学, ダナン理工科大学(以上, ベトナム), ポゴール農業大学, バンドン工科大学(以上, インドネシア), 王立農業大学(カンボジア), チャンパサック大学(ラオス), そして京都大学と, 遠隔会議システムで結び, 短時間ながらそれぞれの大学紹介の時間を持ちました。

つづいて, 広大なマヒドン大学キャンパスを, 電気自動車(トラムと称し, 学内の教職員・学生の移動のため5路線がキャンパス内を巡回)で移動し, 各種の学部, 建物を車内から視察しました。その後, マヒドン大学の得意とする医学部門と工学部門の融合研究センター, 地球環境学堂との共同研究実施実験室などを見学の後, 地球環境学堂が平成28(2016)年1月に設置した京都大学海外拠点オフィスを訪問しました。ここではマヒドン大学および京都大学とのクロスアポイント教員の Suwana Kitpati Bootanon 准教授(京都大学では特定講師)から活動が説明されました。その後, Jackrit Suthakorn 工学部部長らと昼食会を持ち, マヒドン大学訪問の全プログラムが終了しました。

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)



山極壽一総長と Udom Kachintorn 学長 (表敬訪問の様子)



地球環境学堂関連 ASEAN 大学 8 大学への遠隔による総長挨拶



地球環境学堂マヒドン大学パートナーオフィス前での記念撮影

話題

第14回京都大学福井謙一記念研究センターシンポジウムを開催

福井謙一記念研究センターは、第14回京都大学福井謙一記念研究センターシンポジウムを、1月27日(金)に同センター大会議室にて開催し、国内外の研究者、学生等、約80名が参加しました。

本シンポジウムは、理論化学とその周辺分野の研究を活性化するとともに、センターの研究活動を発信する目的で、毎年開催しています。

シンポジウムは、主催者である赤木和夫 福井謙一記念研究センター長の開会の辞、続いて、来賓の北村隆行 工学研究科長による挨拶の後、高塚和夫 同センターリサーチリーダー、高田彰二 理学研究科教授、および八島栄次 名古屋大学工学研究科教授による講演が行われました。

講演会後には、基礎化学・理論化学の分野で顕著な研究業績を挙げた若手研究者を顕彰するために、本年度新たに創設した「福井謙一奨励賞」の表彰式が行われ、受賞者である辻雄太 九州大学分子システムデバイス国際リーダー教育センター助教に対して、赤木センター長より記念盾が贈呈され、引き続き同氏による受賞記念講演が行われました。

その後、公募によるポスターセッションが行われ、会場では、夕刻まで参加者による活発な討論が展開されました。



赤木 福井謙一記念研究センター長による開会の辞



北村工学研究科長による来賓の「福井謙一奨励賞」表彰式挨拶



ポスターセッションの様子



参加者集合写真

(福井謙一記念研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、藤多哲朗 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。



藤多 哲朗 名誉教授

藤多哲朗先生は、平成29年1月1日逝去されました。享年85歳。

先生は、昭和28年3月京都大学医学部薬学科を卒業、同30年3月同大学院修士課程修了、同33年3月同博士課程の単位を修得され、昭和40年12月に京都大学薬学博士の学位の授与を受けられました。この間に昭和34年10月、京都府立医科大学助手に着任され、同38年4月には京都大学化学研究所助手、同42年8月に同助教授、さらに同44年からの2年間のバージニア大学留学を経験された後、同48年3月徳島大学薬学部教授を経て、同60年7月より京都大学薬学部教授に就任され、薬用植物化学講座を担当されました。平成6年3月停年により退官され、同年より本学名誉教授の称号を授与されました。その後も摂南大学薬学部教授、財団法人生産開発研究所学術顧問を歴任されました。

先生は長年にわたり天然物化学の教育と研究に携われ、延命草の薬用成分のエンメインなどの化学構造や生合成機構を解明されるとともに、キノコ等菌類に含まれる生物活性成分の単離、構造決定と機能解明に関する研究に取り組み、国際的に高い評価を得られました。特に、冬虫夏草に含まれる免疫抑制物質の研究では、強い免疫抑制活性を示すISP-1を見出され、その発見を端緒とした台糖（現三井製糖）、吉富製薬（現田辺三菱製薬）との共同研究の結果、多発性硬化症の治療薬FTY720（商品名：ジレニア®、イムセラ®）を発明するに至りました。FTY720は平成22年にロシア、米国で、同23年には日本でも承認され、多くの患者の方々の治療に役立っています。こうした医薬品開発の成果に対して平成23年日本薬学会創薬科学賞、井上春成賞などを受賞されました。

また先生は、平成2年から平成4年まで京都大学評議員を併任され、京都大学、徳島大学の双方にわたって組織運営と後進の指導にも尽力なされたほか、第16代日本生薬学会会長を務められるなど、学会活動を通じてもご自身の研究分野に多大な貢献を示されました。

（大学院薬学研究科）

[目次に戻る ↗](#)